



奇談 冒險 少女島

島に食料がない

▲少女六十人の死活問題▼

永代美知代

少女島は、今まゆみ等が上陸した唯一ヶ所の岸のほかは、お城のやうに四方を峻しい山で圍まれ、中央に廣い凹地があつた。

その凹地の底に三棟ばかりの大きな粗末な建物があつた。その建物の見える處まで来ると、坂の下から二人の年寄つた女が、此方をさして急いでくるのに出會つた。それは紛れもないドイツの女たちであつた。

「あゝマックスさん、ロッゲさん達は？」と、その一人がラツキー大探偵に訊ねた。

「で、こんな怖ろしい鬼婆のやうな老女たちに虐められたに相違ないと思ふと、ひとりでに身震が感じられた。」

やがて建物の前へ来た時、大探偵はまゆみとアスターと一緒に囁いた。

「僕が今あの老女たちを呼び留めるから、あなたは拳銃で脅かすんですよ。」

云ふと共に、大探偵は大喝一聲した。

「悪婆！待てッ！」  
振顧つた二老女の目の前には、二挺の拳銃が光つてゐた。二老女は呀と立ちすくんだ。それへ飛び蒐つて、ラツキー大探偵は見る／＼二老女を高手小手に縛しめた。

「どうだ驚いたか、乃公は米國のラツキー、ホーンといふ探偵だ。」

「えッ？ラツキー？」  
二老女はその名を聞いて蒼くなつてしまつた。  
「いくら汝達がドイツ人で、そのドイツのために盡

「うん、後から来る、また少女達を運んで来たよ。時に、前の少女達にみんな變りはないかね？」  
「えゝゝみんな閉ぢ籠めてあるわ。最初はビービー泣き立てゝ困つたが、昨日あたりから些たア静かになつたやうだよ。」

他の一人の老女はさも憎ていにさう云つて、さつと皆の前に立つて建物の方へ戻つてゆく。  
新らしくこの島の獄へ擡はれてきた二十何人の少女達は、口にくそ出さね、ラツキー大探偵がゐなかつたら、私共も前の少女達と同じ運命の獄に繋がれ

すとは云ひながら、今度の行き方は人間の爲すべき事ぢやない。卑怯な振舞だ。見る、ロッゲも部下の奴等も皆たつた今、自身で船を爆發させて粉微塵になつてしまつた。これを天罰と云ふのだ。」

「えッ！」と二老女は一層眞蒼になつて、  
「そして、そして、食物はどうしました？」  
と、おろ／＼聲でたづねた。

「何だと？食料とは？」  
と、大探偵は聞き返した。

「もうこの島には一日分しか食料がないんです。それに又、こんなに大勢来たのだから――あゝ、私はどうしよう！」

一人の老女はさう云つて泣き出した。  
大探偵も其處まではよく島の様子を知らなかつたのである。三十何人で一日分しかない食料とすれば、六十人近くの人数になれば半日分しかない、今はもう一刻も猶豫すべき處ではない、と大探偵は思つた。  
「飛行機はどこにありますの？ガンリンはあるでせ

うねり」

堪りかねて、まゆみは口を扱んだ。  
「へえー。お前さんは飛行機にでも乗って英國へ注進するつもりなのかい？」  
と、又しても憎らしげな婆さんが、縛られてゐながら毒口をきいた。

「飛行機もガンリンも一等彼方の建物の中にあるのだがね、まさかお前さんのやうな少女の手には合ふまいよ。もつとも首尾よく英國へ歸れて迎への船をよこしてくれるなら、私達の命ものびるといふものだ。私だつてお金かほしいから、ロッゲの手下にもなつて、こんな淋しい島へ來もしたのサ、餓死するよりは英國の監獄へ入る方がいゝわサ、命あつての物種だからね——」

まゆみは腹立たしくて眞赤になつた。うその雑言を耳にする勇氣はなかつた。

「大探偵、些とも早い方が可いでせうと思ひます、私はすぐ出かけます！」

さう云ふや否や、まゆみは飛行機の格納庫に向つて走つていつた。アスターも數人の少女も、一緒に後から駆けて行つた。

### 飛行機に乗つて

▲ロンドンへ急ぐ海上の奇難▼

ちやんと組み立てゝあつた飛行機は、すぐさま格納庫から引き出された。まゆみは油槽にガンリンを詰めると、發動機の試験に取りかゝつた。機具合はずべて申分なかつた。

まゆみは不意に、自分の周圍を歡呼の聲に取り巻かれた。今まで何日かの間、窓もない薄暗い牢獄に閉ぢ籠められてゐた三十何人かの不幸な少女達が、一時に扉を開け放たれて、久しぶりで日の光りを見た嬉しさ、自分達を救ふために、濤の上、大空遙かにロンドンへ飛行しようとするまゆみの健氣な決心を聞いた嬉しさに、その少女達が一散にまゆみの傍へ駆けつけたのであつた。

「日本のお姉様！私達を救つて頂戴。」  
さう云つて送み交りに握手を乞うた。中には吾を忘れて、まゆみに抱きついてキスした少女さへあつた。まゆみの眼からは熱い熱い涙がこぼれた。

「待つて被在い、私がすぐお迎への船をよこしますから！」

「屹度よ、日本のお姉様！」

「えい、きつとー」

まゆみは又しても涙がこぼれた。この少女達は、もうたつた半日分しか



食料のないことを知らないのだ。私がいくら早く英國へ行き着いても、それから迎への船の來るまでには、随分餓を忍ばねばなるまい。それに萬一も私が途中で墜落して魚の餌食ともなるやうなことがあれば——

「いえ、いえ、きつと成功する、今度の飛行は正義の神様に護られてゐる。」  
まゆみは自分の責任の大きさを感じた。

其處へ、ラツキー大探偵が大きな茶碗に紅茶をいれて持つて來た。

「ちやアまゆみさん、六十人の生命を助けて下さい。」

これはこの少女島のある位置を示す海圖です。まゆみは感謝しつつ、その紅茶を飲み、その海圖を受けた。そして飛行機の操縦席についた。

『では大探偵、アスターさん、皆さま行つて参ります。』

『御無事で！バンザーイー！』

口々に叫ぶ訣別の意味深い言葉——手に——打ち振るハンカチーフの白、紅——發動機の爆音は次第に空へ、見る／＼飛行機は遙かに——英國の空をさして影を没した。

たしかにこの飛行機は、ドイツの飛行機の中でも新式の一つであつた。速度は一時間六十哩ほどあるけれども、その構造は輕快で、堅牢で、これならば、全速力で三時間も飛べば、十分ロンドンへ行き着けるだらうと思はれた。まゆみは心に神を祈りながら、雲を縫ひ、風を避けて、一氣にロンドンの方向をさして飛行を續けてゐた。

やがて左手に遠く英國の山々が見え初めた。それ

が次第に明らかになる。これはどの邊であらうか、地圖に照らし合はせて見ようと、まゆみは次第に下げ舵を取つた。

然し、まゆみは驚かされた。機が五百米突ばかりの低い處へ降りて來た時、思ひがけもなく真下の海上から砲聲が聞えた。見下すと、日本の軍艦が飛行機射撃砲を空に向けて、自分の飛行機を覗ひ撃ちにしてゐるのであつた。

まゆみは吃驚したが、併しその彈丸を避けるために、巧みに波狀飛行を行ひながら、ふと考へついたので、片手で自分の眞白な上衣をぬいで、二度三度それを打ち振りつゝ、ゆる／＼と海上近くへ降りて行つた。

日本の軍艦は、それと見ると砲撃をやめて、靜かに飛行機の近づくのを待ち構へた。それは、甲板將校の兩眼鏡に、一人の少女が飛行機に乗つてゐるのが映つたからである。それもどうやら日本の少女らしい！

『ついで』